

# 白氏文集 三十三 長恨歌 (三)

加藤 淳平

唐の玄宗の治世は、我が邦奈良時代前半に當る。この治世の初めに我が阿倍仲麻呂、吉備眞備らとともに、遣唐使船にて唐土に渡れり。仲麻呂、科擧に合格して唐の官途に就き、玄宗皇帝の側近に仕へ、王維、李白らと親交を結ぶ。安祿山の亂直前に歸國を圖れど叶はず、晩年は、今のヴェトナムの節度使等の要職を歴任す。同時代の唐にありし人なり。

長恨歌 (三)

長恨歌 (三)

九重城闕煙塵生

九重の城闕に 煙塵生じ

千乘萬騎西南行

千乘萬騎 西南に行く

翠華搖搖行復止

翠華は搖搖として 行きて復止まる

西出都門百餘里

西のかた都門を出でて 百餘里

六軍不發無奈何

六軍發せず 奈何ともする無し

苑轉峨眉馬前死

苑轉たる蛾眉 馬前に死す

花鈿委地無人收

花鈿は地に委せ 人の收むる無し

翠翹金雀玉搔頭

翠翹金雀 玉搔頭

君王掩面救不得

君王面を掩ひて 救ひ得ず

回看血淚相和流

回看すれば 血淚相和して流る

黃埃散漫風蕭索

黃埃散漫 風蕭索

雲棧縈紆登劍閣

雲棧縈紆して 劍閣に登る

峨嵋山下少人行

峨嵋山下 人行少なく

旌旗無光日色薄

旌旗光無く 日色薄し

蜀江水碧蜀山青

蜀江水は碧に 蜀山青く

聖主朝朝暮暮情

聖主 朝朝暮暮の情

行宮見月傷心色

行宮に月を見て 傷心の色

夜雨聞鈴腸斷聲

夜雨に鈴を聞きて 腸斷の聲

(大意) 都は荒れて、九つの門の重なる皇帝の宮殿に煙塵が立つ。玄宗は都を棄て、千輛の車と一萬騎の近衛兵を引き連れて、西南の四川に向かふ。天子の翡翠の羽の旗印は、進んではまた止まる。都の西百餘里(約五十キロ)の馬嵬に來ると、近衛軍の六つの部隊は、楊貴妃の處刑を求めて進發せず、どうともしやうがない。美しい眉の麗人は、遂に君王の馬前で縊り殺された。螺鈿のかんざしは地に棄てられ誰も見向きもしない。翡翠の羽根や金の孔雀の髪飾りも、玉の笄も同様である。君王は顔を手で覆つて助けることができず、何度も後ろを振り返つては血の涙を流す。黄色い砂埃の立つ道を進み、風が悲しげに吹く。雲の懸かる蜀の棧道(岩に掛けた懸け橋の道)は曲がりくねつて、四川の境の劍閣山を登つて行く。漸く着いた四川の峨嵋山の下では道を行く人は少なく、天子の旗も色褪せて見え、日

の光も薄い。四川の川の水は碧りに澄み、四川の山は青いが、君王は朝は朝、夕べは夕べ、毎日亡くなった人を思う。行宮で月を見るたびに心が痛み、夜の雨に鈴の音を聴けばはらわたがちぎれるやうである。

(平成三十年七月五日受附)